

観光文化委員会

平成27年4月17日（金）広島市において、仁田委員長をはじめ委員30名出席のもと、平成27年度第1回観光文化委員会を開催した。

委員会では、平成26年度の事業報告および平成27年度事業計画（案）について審議し、原案どおり承認された。議事後、「中国山地の歴史文化資源の掘り起こしとネットワーク化調査」および「九州圏在住者から見た中国地方の観光地の実態と魅力度調査」の報告を行った。

なお、議事に先立ち、島根大学教授 作野 広和氏より『やまなみの可能性～中国山地のこれまでと



これから～』、（一社）松江観光協会 観光文化プロデューサー 高橋 一清氏より『中国山地を歩いた作家たち』をテーマにご講演いただいた。

【講演 1】

○演 題

『やまなみの可能性
～中国山地のこれまでとこれから～』

○講 師 島根大学教育学部

教授 作野 広和 氏

■三海二山交流圏の意義

平成8年、中経連は中国地方の発展の方向を示す中国地方発展ビジョン～三海二山交流圏構想～を提言し、その展開に向けて、瀬戸内海グランドデザイン構想、山陰・日本海国土軸グランドデザイン構想を策定。瀬戸内での連携の成果として「瀬戸内海歴史文化回廊」、日本海軸での連携の成果として「山陰・日本海歴史文化回廊」を作成。近年、瀬戸内海、山陰・日本海の歴史文化回廊をリバイスし、去年は私が編集長となり「中国山地歴史文化回廊」を新たに作成した。

これらの歴史文化回廊は東西軸に着目したものであるが、将来、四国も巻き込んだ南北軸についても是非挑戦していただきたい。新しい軸を提示することで具体的な動きにつながると考える。例えば、しまなみ海道のサイクリングがやまなみ街道と通じて串刺しにつながっているが、このような南北軸での取組みが一層必要である。



■歴史に語る「やまなみ」(中国山地) の可能性

「中国山地歴史文化回廊」にみる中国山地の特徴は次の4点に整理される。

- ①山が低く山地の奥深くまで人が住む
(人くさい)
- ②たたら製鉄や鉱山が山間の集落を維持
- ③南北の幅が狭く、人々が山を越えやすい
- ④人が入りやすいが出やすいため過疎の先進地
この特徴をツーリズムに活用するのであれば、脊梁山地でのサイクリングやランニング、バイウェイとなった54号線を生かしたツーリング、たたら製鉄などの産業ツアーや体験ツアー、中国山地でのコンテンツツーリズムが考えられる。

■「やまなみ」を支える人々の暮らし

これまで日本は加工貿易型、つまり輸出で海外へ補完性を求めていたが、今後は、環境、エネルギー、安全・安心な食料など、国内に補完性を求めることになり、その補完の行き先が中国山地になると考えるべきであろう。その際に重要となるのが社会関係資本と文化力である。内閣府の都道府県別ソーシャル・キャピタル指数を見ると、島根県が1位、鳥取県が2位となっている。さらに、山陰から5市町が暮らしやすさベスト10に入っているが、このような美しく豊かな農村や文化を維持、再生産していくためにはクリエイティビティーが必要となる。単に農業とか地産地消というだけではなく、コミュニティや日常の暮らしにこそ求めるものがある。一方で田園回帰が起こっているが、全

ての中国山地の農村地域がその受け皿になることは非常に厳しい。要は、歯を食いしばって地域づくりを行っていくしかないのである。

■おわりに

沿岸部における三白(米・塩・紙)に対して、三黒(山間部の鉄・炭・牛)がかつての中国山地の産業、文化の基底であった。しかし、時代の変化の中で産業としては成り立たなくなっており、新しい時代に向けて対応していかざるを得ないという状況である。縦横入替えた「太極図」に表わされるように、陰(山陰)と陽(山陽)は裏腹であって、陰があるから陽がある、陽があるから陰があるという、持ちつ持たれつ、森羅万象あらゆることが渾然一体となって存在する。中国山地はその境界線で、陰と陽を合わせ見る、合わせ鏡であるといえるのではないか。

【講演2】

○演 題

『中国山地を歩いた作家たち』

○講 師 (一社)松江観光協会
観光文化プロデューサー
高橋 一清 氏

■松本清張

昭和42年、文藝春秋に入社して間もなくの深夜に原稿の受取りに上り、どてら姿でひげ面の清張さんと初対面。この時、取次ぎの方と勘違いして「そんなところへぼやっと立ってないで、早く松本清張先生を出してください。」と、とんでもない失態をやってしまった。とはいうもの清張さんとは、その後、『文藝春秋』時代に連載小説『強き蟻』を、『週刊文春』に移ってからは『西海道談綺』を担当させていただいた。当時清張さんは60歳で、新聞連載2本、週刊誌連載が3本、月刊誌連載が3本、その他依頼原稿多数をこなす超多忙な作家だった。

清張さんが幼いころ、鳥取県日野郡矢戸村生まれのお父さんから聞いた四十曲峠を越えたときの話が、最高傑作『西海道談綺』を書く時の大変大事な動機になったと聞いた。



慶応2(1866)年、長州征伐で大村益次郎に攻められ浜田城が落城。浜田藩士とその家族3,000名が、この四十曲峠を越えて美作国久米北条の飛び地へ移り、鶴田藩^{たづた}をおこした。浜田人の矜持を保ち清貧の暮らしをしたことなど、津山あたりの人々は敬意をこめて語ったものだという。

■藤原審爾

藤原さんは岡山なまりが強く、私の故郷、石見の益田の言葉遣いと似ていたため、親元に帰ったようで心が和んだ。藤原さんの道楽の一つが野球チーム「藤原組」。高校生の頃に甲子園出場経験のある球児で大学の野球部に入らずのびのびプレーをしたい選手を集めてポケットマネーでチームを結成。試合前、対戦相手がオーバースローのピッチャーだと判ると、打撃練習のためピッチャー経験のある私は呼び出された。これも作家付合いだが、いまひとつおいしいご飯には弱かった。

藤原さんは幼くして母に逝かれ、6歳で父とも死別している。粉わさびの製法を研究していたお父さんが匹見で危篤になり、審爾少年は益田から匹見へ入り、雪原でお父さんを茶毘に付した。井伏鱒二さんも幼少期に父、叔母、弟を亡くしている。人間の命は本当に儚いものだとすることを身にしみて知って幼少期を育つ、そして、そういう心の中に宿すものを持って作家というのは育つのだと感じている。

■井上 靖

戦争が激しくなってからは家族を鳥取県の日南町に疎開させ、井上さんは大阪に残り記者として毎日新聞社に通った。昭和20年8月15日、翌日の新聞に掲載する「終戦の詔勅を聞いて」を井上さんは書いた。ご自身も、歴史的な文章を書いたことを誇りに思っておられた。

■たたら

奥出雲でたたらが栄えたのは、砂状に風化した良質の鉄分を含んだ花崗岩が採れることと、木炭が豊富であったことによる。鳥根では1週間に1回前線が通り、雨になる。これにより山林が育った。事業を興す時、先人たちはこのように自然環境をよく見て、その恵みを謙虚に受け止めていた。

今は何でも科学の力で作ればいいという発想になるが、天然の恵みを感謝をこめて大事に受け止め、そこから発想していくのが、他の生きものと共生する自然の摂理に叶い、本当の意味での長続きする安全と安心の世界であろうと考える。

■永井路子

『山霧』は日本経済新聞の連載であったが、これを単行本にし、そして文庫として世に出す仕事のお手伝いをした。これは平成9年、NHK大河ドラマ『毛利元就』の原作である。この放映による経済効果は937億円といまだ抜かれていないほど巨額で、343万人の観光客が広島県、山口県、島根県を訪れた。

益田家の品川大膳が取り上げられた回るとき、永井さんにお頼みし、ドラマ終わりの舞台紹介コーナーで私の出身地である益田を放映していただいた。毛利元就という傑出した武将が10年の歳月をかけてやっと調略できたほどの実力があり、なおかつ海洋領主として財力を持っていたのが益田家である。その中で品川大膳は、当時、最高の剣術つかいだった山中鹿介を一騎打ちで追い詰め、秋上伊織介の助太刀が加わってようやく打ち取られたのである。品川大膳は大層な剣術つかいであったわけだ。その一騎打ちのシーンでは、品川大膳役を大河ドラマの殺陣指導者である林邦史朗氏本人が甲冑に身を固めて演じ、最高の剣術を披露している。

■過疎

共同通信の今井幸彦編集委員が、私の母の里である匹見の人口の激減ぶりを書いたルポルタージュの中で、過疎という言葉を使って全国配信されたのがきっかけで、人口減少、集落破壊を指す言葉として使われることとなる。今井氏は坂本竜馬を斬った男といわれる今井信郎の孫にあたる。

エネルギー革命で燃料が炭や石炭から石油に変わり、炭焼きの山地の集落が疲弊したが、昭和38年の「三八豪雪」をきっかけに過疎の波が一気に押し寄せた。竈を壊し、廃屋と認定されると何年とたたないうちに雑草の中に瓦だけが残る集落になる。日原のさらに山奥のそのような集落を

見続けていた作家が水上勉である。私も匹見の奥の広見という集落を見続けている。

■種田山頭火

山頭火の俳句に〈落葉するこれから水がうまくなる〉〈水の味も身にしむ秋となり〉がある。秋になると、西日本から九州の軟水の硬度が1ℓあたり10～20mgから40～50mgと上昇し、とてもおいしい水に変化する。落葉広葉樹林は葉を落とし、そこに雨が降り、水は地下に染み、おいしい水となるのである。広島国際学院大学 佐々木健教授の著書『名水紀行 山頭火と旅するおいしい水物語』には、「山頭火がおいしいと感じた水は軟水で、しかもふるさと防府の地下水と同質。彼は全国を放浪し、ふるさと防府の名水の水質を感じた時に感動が高まり、水の名句を残したのであろう。」とある。

山頭火の俳句を3つ紹介する。〈ふるさとの水をのみ水をあび〉〈やっぱりおいしい水のおいしさ身にしみる〉〈ふるさとの水だ腹いっぱい〉

私達は他にもないふるさとで身も心も満たされるのである。

〔議 事〕

1. 平成26年度事業報告

1. 観光文化委員会の開催

2. 中国地域における観光振興の課題・方向性の検討

「九州圏在住者から観た中国地方の観光地の実態と魅力度」調査を実施。

3. 中国山地の歴史文化資源の掘り起こしとネットワーク化調査

今後の中国山地歴史文化資源の観光活用のあり方について検討。

本調査結果を反映し、「中国山地歴史文化回廊」を作成。

4. 夢街道ルネサンス推進会議、中国地方風景街道協議会の活動の推進

ちゅうごく街道交流会議の開催等。

5. 西日本広域観光ルートの開発・市場調査

西日本の経済団体や観光組織と連携して、東のゴールデンルートに対抗できるルート開発に向けた活動を行った。

6. 中国地域観光推進協議会への支援・連携

(1) 「2014中国地方インバウンドフォーラム」の開催

9月松江市にて開催。商談会・意見交換会、視察ツアー等を実施。

新たにタイの旅行社を招請。

(2) ウェブサイトでの情報発信強化

(3) 一般市民への情報発信・認知度向上

テレビ、旅行雑誌、ブログ等の活用。東南アジア向けにフェイスブック、フリーペーパーの活用、香港向けガイドブックの作成、タイ・台湾での国際旅行博への出展。

(5) FIT（個人旅行）で周遊してもらうための受入体制の充実

クーポン券の作成。

(2) 調査

「東南アジアからの観光客ニーズ分析と受入体制整備方策検討調査」を実施し、中国地域観光推進協議会、観光関係の行政や民間事業者へ情報提供を行う。

3. 夢街道ルネサンス推進会議、中国地方風景街道協議会の活動の推進

4. 西日本広域観光ルートの開発・市場調査

西日本の経済団体や観光組織と連携して、東のゴールデンルートに対抗できるルート開発に向けた活動を行う。

5. 中国地域観光推進協議会への支援・連携

(1) 「2015中国地方インバウンドフォーラム」の開催

9月岡山市にて開催。新たにシンガポールの旅行社を招請。

(2) ウェブサイトでの情報発信強化

(3) 一般市民への情報発信・認知度向上

テレビ、旅行雑誌、ブログの活用。旅行ガイドブック（タイ）や観光パンフレット、香港・シンガポール向けドライブマップの作成、タイ・シンガポールでの国際旅行博への出展等。

(4) FITで周遊してもらうための受入体制の充実

アクセスガイドの刷新等。

(担当：菰下)

II. 平成27年度事業計画

1. 観光文化委員会の開催

2. 観光振興に関する事業（調査・研究）

(1) 中国地域における観光振興の課題・方向性の検討

「四国圏在住者から見た中国地方の観光地の実態と魅力度」をウェブ調査により実施し、当地方の認知度向上やイメージの醸成に役立てる。

